# 掛詞の翻訳の問題・「さよふけて」をめぐって

## ――『百人一首』翻訳論その２――

カーロイ・オルショヤ

### 1. はじめに

翻訳という作業には、必然的に欠落がつきものである。原作品が書かれた言語（起点言語）の特徴があり、ジャンル特有の技法がある。その特徴、技法を目標言語に翻訳するのは難しいことであり、或いは翻訳不可能な場合もある。文学作品の命である技法が翻訳という作業によってなくなってしまうのは、翻訳の欠落といえる。

また、目標言語の特徴やその国の様々なジャンル特有の技法があり、それらの技法が原作品の技法の代わりに使われることもある。この作業によって、文学作品に「余分」な要素が加わる[1)]。翻訳者は原作品と目標言語に合わせて、様々な工夫をしながら翻訳を進めていき、翻訳版の作品を生み出している。理想的なのは、原作品の特徴を保ち、欠落を最低限にしながら、「余分」も最低限にすることである。しかし、これを達成するのは難しく、世界中の翻訳者はこの問題に悩まされている。いかなる手段を用いても、完璧な翻訳を生み出すのは至難の業である。

しかし、難解であるからこそ、原作品を研究し、翻訳作業を十分に考察する必要があると思われる。これは、近代の文学作品ではもちろんのこと、古典作品にも当てはまる。というのも、身近な現代文でさえ、文化の違い、原作品と目標言語の技法の違いが多く見られるが、古典になると、更に現代と遠ざかって行き、翻訳は一層困難になる。

和歌の場合、枕詞、掛詞、縁語など、和歌の命ともいえる技法が複数みられる。

これらの技法によって、歌の意味が深まり、短いながらも様々な解釈が可能となり、たった一首の歌について極めて長い論文が書かれるのも珍しくない。

和歌の翻訳は、歌そのものの翻訳だけではなく、文化の翻訳でもあり、適切に考察する必要がある。本稿では、こういった翻訳作業によって生じる歌の内容の「欠落」と「余分」について考察していきたい。

## 2. 問題提起

日本の文学作品の中で初めて英訳されたのは『百人一首』である[2)]。その初訳を行った Dickins が技法の翻訳について次のように述べている：

> 日本の古典和歌に押韻、そして正確に言えば韻律もない。そのため、構文のちょっとした自由に、語法と倒置法のほか、この言葉ジャグラーリー（掛詞）と枕詞が唯一の修飾法であった。言葉遊びは形がマネすることさえ極めて難しいことであるが、価値（意味）は多かれ少なかれ、翻訳に反映させることが多くの場合可能であろう[3)]。

つまり、技法として翻訳するのが不可能であっても、意味的に訳すのは可能であると述べている。

掛詞の機能は主に二つある。一つは、歌に複数の意味を持たせることによって、歌の世界を更に広く、深くすることであり、もう一つは、序詞を主想とつなげることである。日本語には「同音異義」の言葉が多くあり、そのためか、掛詞という技法が和歌において積極的に使われるようになったともいえる。もちろん、同音異義の言葉は他の言語にも存在するが、文学においてはユーモアの要素を持たせるために使われることが多く、日本語の和歌で用いられるような、歌の意味を深めるといった用法はあまりみられない。

『百人一首』の掛詞の翻訳例として Teele 氏が挙げているのは、在原行平の「たち別れいなばの山の峰におふるまつとしきかば今かへりこむ」である[4)]。この歌には地名の「因幡」に「去なば」が掛けられ、更に名詞の「松」に動詞の「待つ」が掛けられている。この歌なら、英語の場合一番容易に翻訳できる。なぜならば、英語の「松」にあたる「pine」という言葉が「待つ」という意味も

もっているからである[5)]。例えば、1996 年の Mostow 訳は次のようになっている。

Even if I depart　私が去っていって
And go to Inaba Mountain,　イナバヤマに行っても
On whose peak grow　（そのイナバヤマに）生えている
Pines, if I hear you pine for me,　松、あなたが私を待っていると聞いたら
I will return straightway to you.　すぐあなたのところに戻ってくる

Mostow 訳には上述のように、「pine」が 2 回訳出されている。1 つは「松」の意味で、もう 1 つは「待つ」の意味で使われている。「pine」の使用によって、掛詞「まつ」の両方の意味が訳出されている。しかし、Teele 氏も指摘しているように、「pine」以外の、掛詞として使える同音意義の英単語は他に見当たらないように思われる。

では、他の、掛詞が詠み込まれている歌を翻訳する際、どのような手段があるのであろうか。本稿で検討していきたいのは、「さよふけて」という表現である。たった 100 首の『百人一首』の中で、表現の用例が複数ある歌は少なくない。今回取り上げる「さよふけて」も、『百人一首』には 2 回用いられている。

## 3. 参議雅経の「さよふけて」

『百人一首』に「さよふけて」という表現が使われている歌が 2 首収められている。1 つは赤染衛門の「やすらはで寝なましものをさよふけてかたぶくまでの月を見しかな」、もう 1 つは参議雅経の「み吉野の山の秋風さよふけてふるさと寒くころも打つなり」である。

前者の「さよふけて」は時間経過の表現であるが、後者は掛詞であると、吉海氏が次のように指摘している。

> 秋風は「吹く」ものであるから、時間経過を意味する「さよふけて」に直接つながらないことがわかる。その後の歌詞をたどってみても、「秋風」を受ける語は見当たらない。（中略）定家の歌は建久元年（一一九〇年）の『花月百首』で詠まれた歌で、「風ふけて」を読み込んだ歌として最も早いもので

ある。ということは定家の造語（新歌語）という可能性も高い。（中略）「風ふけて」と同様に、「小夜更けて」も「風が吹く」意味を有していることになる。要するに「ふけて」は、「更く」に「吹く」が掛けられた掛詞ということになる。（中略）「小夜更けて」を掛詞とする説は江戸時代に既に存していたことになる。それにもかかわらず、市販されている百人一首本で、「更けて」を掛詞と説明しているものは見当たらない[6]。

上述のように、「さよふけて」の「ふけて」は「吹く」と「更く」の掛詞である。また、「吹く」と「更く」の活用は違うが[7]、定家が「風ふけて」という表現を初めて歌に詠むことによって、「さよふけて」が影響を受け、「吹く」と「更く」の掛詞となったのであろう。

では、英訳においては掛詞と捉えられているか否か、次の章で考察していきたい。

## 4. 参議雅経歌の英訳

Mostow 訳以外、掛詞についての説明が翻訳本には書かれていないが、「ふけて」を掛詞として捉えないと、「吹く」という意味は読み取れない。しかし調査した 19 訳中[8]17 人も「吹く」という意味を訳出している。「吹く」という言葉を使っていないのは、Galt と Mostow の二人だが、「ふけて」は掛詞であることを意識しているのが明らかなのは、Mostow のみである[9]。

次にこの Galt 訳と Mostow 訳を詳しく考察してみよう。

Mostow（1996 年）
Fair Yoshino　遠い吉野に
the autumn wind in its mountains　秋風がその山々に
deepens the night and　夜を更けさせる、そして
in the former capital, cold　元の都に、寒い
I hear the fulling of cloth.　衣の縮絨を聞く

Galt（1982 年）

Dusk and autumn wind　夕暮れと秋風
From Beautiful-Luck-Field Hill,「美しい幸運の野」山から
My little village,　私の小さな村
The dismal chill, sounds of cloth　憂うつな寒さ、衣の音
Beaten by women's mallets.　女の杵に打たれている

Mostow 訳の風に関する部分は「秋風によって夜が更ける」であり、Galt 訳は「夕暮れと秋風『美しい幸運の野』山から」である。Mostow 訳には擬人化が使われており[10]、風によって夜が更けると訳している。Galt 訳の場合、風を受ける動詞が省略されている。

英訳には、Mostow 訳以外は掛詞について説明されていないが、「吹く」という意味を殆どの訳者が訳している。それに対して、Mostow 訳では「吹く」と書かれていないが、風の存在によって「吹く」の意味が読み取れる。しかし、「ふけて」を掛詞として認めているのであれば、「吹く」を訳出するはずであるため、掛詞説を意識していても、翻訳では掛詞としていないと言える。

普段、掛詞の両方の意味が訳出されている場合、翻訳者は掛詞を意識していると判断できる。しかし、吉海氏も指摘しているように、日本の百人一首本の多くは掛詞説に触れていないため、それを参考にしている訳者も掛詞として捉えていないと推測できる。

では、「ふけて」を掛詞として捉えないと、なぜ両方の意味を出しているのであろうか。和歌では省略がよく使われており、この歌の場合も、「吹く」が省略されているという解釈も可能であろう。となると、「ふけて」を掛詞として捉えなくても、「吹く」の意味を読み取れる。現在市販されている『百人一首』本の作者、または翻訳者も、雅経歌を「吹く」が省略されているように捉え、「ふけて」を掛詞として捉えていない可能性が高いと言える。こうした捉え方によって歌の翻訳には意味的な欠落がないものの、翻訳においては技法の欠落がみられる。Mostow 訳と McMillan 訳の場合、擬人化という技法が使われているが、その技法によって、「風」が積極的に行動する登場人物に変換されてしまい、歌に「余分」が加わる。

## 5. 結び

本稿では、参議雅経の歌の「ふけて」に焦点をあてて、翻訳作業によって生じる歌の内容の「欠落」と「余分」について考察した。

この歌の多くの翻訳には掛詞「ふけて」の技法の省略がみられるが、掛詞の意味両方が訳出されている。百人一首英訳の先駆者である Dickins も既に指摘しているように、掛詞を技法として訳出するのが不可能であっても、意味の翻訳は可能である。両方の意味を訳出しているのであれば、翻訳は説明的になってしまい、また意味の欠落はないものの、技法の欠落はみられる。文学作品は技法が使われているからこそ、文学作品である。これらが省略されてしまうと、意味の欠落がなくても、歌を文学作品にする技法は欠落してしまう。しかし、掛詞を技法として訳出するのは困難である。掛詞の欠落を補うため、翻訳方法として別の、「余分」を生み出さない技法を使うのが望ましいと考える。

## 6. 翻訳の提案（ハンガリー語）

ここで意味の欠落も「余分」もない翻訳を提案してみたい。稿者の目的は、『百人一首』のハンガリー語訳を作ることであるため、提案の訳はハンガリー語であるが、翻訳の方法は他言語にも適用できる。

Mijosino hegyén　み吉野の山に
Miként fúj az őszi szél　秋風が吹くように
Úgy mélyül az éj　夜が更ける
Az ősi főváros hideg　昔の京が寒い
Ütések hangja a vásznon　衣を打つ音

この訳は「吹く」と「更ける」の、両方の言葉を訳出した。それに加え、原作品の「ふけて」が「風」と「さよ」、両方を指すことから、直喩を使った。言葉上直喩ではあるが、ハンガリー語として「のように」以外にも、「同時に」という意味も読み取れる。原作品にも、「風が吹いている」と、「夜が更ける」は同じ時間に起こっている現象である。そのために、内容として「余分」が生じない。

もちろん直喩と掛詞は異なる効果をもたらす技法である。しかし、掛詞が訳出されないと、技法の欠落が生じる。その技法の欠落を防ぐため、この歌の場合、意味的に「余分」を起こさない直喩を使用することにしたのである。

## 注

1）「余分」は原作品にはなく、翻訳作業によって追加された内容のことを指している。

2） F. V. Dickins, 1865 年

3） “As there is neither rhyme nor, properly speaking, rhythm in old Japanese verse, this word-jugglery was, with the literary epithets (makura-kotoba, the so-called pillow-words), the only decoration available, apart from diction and inversion, together with some license in syntax. The form of the word-plays can, of course, hardly ever be even imitated, but their value can be often more or less preserved in the translation.” 以上の原文を稿者が訳した。

4） Nicholas J. Teele『英訳百人一首の世界』（百人一首万華鏡　2005 年）

5） ハンガリー語においても、「待つ」にあたる「vár」という動詞が名詞として使われると「城」という意味になる。

6） 吉海直人『「さ夜ふけて」の掛詞的用法』（解釈　第六十一巻第九・十号、2015 年）引用で触れられている定家歌は「さむしろや待つ夜の秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫」（拾遺愚草・上）である。

7） 活用の違いについて吉海氏も（2 に同じ）、また作家の北村薫氏も（『詩歌の待ち伏せ 2』（文春文庫、2006 年））指摘している。

8） 付録を参照。

9）「In early modern commentaries, the San’oku Shō is the first to point out that the phrase akikaze sa-yo fukete can be understood to mean “autumn deepens, the wind blows, and the night deepens.”」

10） Mostow 訳以外に McMillan 訳でも擬人化が使われている：

The autumn wind　秋の風が
blowing down　吹き降ろす
the mountain　山に
brings on the night.　夜をもたらす
At the old capital　古い都の
of Yoshino　吉野に
it gets colder,　寒くなる
and I can hear　そして、私は聞こえる

pounding – (衣を打つ) 音
cloth being fulled. 衣が縮絨されている

## 付録　「雅経歌の英訳」

※ 1941 年の吉田訳は Porter 訳と一致しているため、このリストから外すことにした。

1　Dickins, 1866 年
Now autumn-gusts sweep
Down Miyoshino's steep,
And far into the night so drear
The sound of beating of the cloth,
Borne to me on the night-wind forth,
From my lonely village home, I hear.

2　Noguchi, 1907 年
Down Miyoshino the Atumn wind blows,
The night is deep :
The beating sound of cloth
From my mountain home is cold.

3　Komiya, 1908 年
Now autumn wind sweeps down the steep of Miyoshi
-no and I hear the sound of beating of cloth borne forth to me by the night wind, from my lovely village home.

4　Porter, 1909 年
Around Mount Miyoshino's crest
The autumn winds blow drear ;
The villagers are beating cloth,
Their merry din I hear,
This night so cold and clear.

5　McCauley, 1917 年
From mount Yoshino

Blows a chill, autumnal wind,
In the deepening night.
Cold the ancient hamlet is ; –
Sounds of beating cloth I hear.

6　Honda, 1947 年
O how cold and drear
It blows down Mt. Yoshino!
And on this lone night
Of autumn somewhere I hear
The sounds of beating cloth go.

7　Yasuda, 1948 年
Autumn breezes blow
Deep into night from the peak
Of Mt. Yoshino,
And the fulling-block sounds cold
At my hamlet home of old.

8　Rexroth, 1964 年
From Yoshino
Mountain the autumn
Wind blows, Night wanes.
The village grows cold.
Fullers' mallets sound.

9　Levy, 1976 年
Down blow
autumn wind
from Yoshino Mountain,
cold my old village,
where
clothes are beaten.

10　Miyata, 1981 年
From Mount Yoshino
The autumn winds passing,
The night is far spent,
And chill in this old hamlet
There echo sounds of beating cloth.

11　Galt, 1982 年
Dusk and autumn wind
From Beautiful-Luck-Field Hill,
My little village,
The dismal chill, sounds of cloth
Beaten by women's mallets.

12　Takei, 1985 年
Chilly breeze blows down from the mountains late in this
Autumn night. In old Yoshino I hear the sound of cloth-beating.

13　Kirkup（監修）, 1989 年
Night is drawing to a close in the fall wind
That is blowing down to the mountains.
The old Capital of Yoshino is cold.
I hear the echoes of the fuller's bat.

14　Carter, 1991 年
In fair Yoshino
autumn winds blow from the mountains,
late into the night ;
and cold in the old capital-
the sound of mallet on block.

15　Idei, 1991 年
Now night draws nigh,
As the wind comes
Down from Mount Yoshino.

In the chill over the village
We can hear the fulling block.

16　Mostow, 1996 年
Fair Yoshino
the autumn wind in its mountains
deepens the night and
in the former capital, cold
I hear the fulling of cloth.

17　McMillan, 2008 年
The autumn wind
blowing down
the mountain
brings on the night.
At the old capital
of Yoshino
it gets colder,
and I can hear
pounding-
cloth being fulled.

18　Miyashita-Welch, 2008 年
the autumn wind blows
from the mountains of Yoshino
deep into the night-
as the ancient capital grows colder
the villagers beat fabric into softness

19　Stuart Varnam-Atkin, 2012 年
A cold mountain wind
Envelops Yoshino tonight ;
The sound of cloth being pounded
Echoes through the night.